平成27年度とくしま教育の日実施事業　第17回徳島県民文化祭共催事業　文化の森開園25周年事業

竹槍を持ち行進

特別企画展

終戦70周年記念

民衆が見た戦争

千蔵寺釣鐘供出

大日本国防婦人会

2015. 8.5水 ―10.25日

［会　　場］ **徳島県立文書館**

［開館時間］ 午前9時30分―午後5時

［休 館 日］ 毎週月曜日、毎月第3木曜日（祝日と重なった場合は翌日）

［観 覧 料］ 入場無料

関連行事

文書館ナトコ映画祭

［日　時］ 8月15日(土)～22日(土)　午後2時～午後4時

［会　場］ 徳島県立二十一世紀館ミニシアター

展示解説

［日　時］ 8月30日(日)・10月4日(日)　午後1時30分～

伊丹家出征銘板

国婦銃後の花
徳島県地方本部編

神山町
大東亜戦争関係書綴

徳島婦人国防漫画（昭和15.9.10）

土岐ツネノ書簡（部分）

文化の森総合公園 徳島県立文書館
Tokushima Prefectural Archives

ごあいさつ

今年は、太平洋戦争が終結して70年目となります。日本周辺のアジア・太平洋諸国を巻き込んだ今次戦争は、歴史上類を見ない大規模戦争となり、未曾有の被害を国内外にもたらし、多くの尊い命が失われました。

戦後、日本の平和の礎は、戦争への道を歩んだ歴史に対する深い反省と戦争の惨禍からの教訓にもとづいて築かれたといえます。そこで、当館では戦後70年を機に、改めて今次戦争のもつ意味を考えてみたいと考え、特別展を企画しました。

当館では、これまで戦争に関わる展示をそれぞれの節目ごとに開催してきました。平成7年度には、「戦後50年を見つめて－徳島の復興－」をテーマに、農地改革・教育改革・行政改革を中心として徳島の戦後改革について紹介しました。つづいて、平成17年度には「戦後60年のメッセージ－伝えたいあの時を－」のテーマのもとに、戦後60年における徳島の歩みを生活者の視点からとらえ、紹介しました。

今回の展示では、「終戦70周年記念　民衆が見た戦争」と題して、当時の民衆と戦争との関わりに焦点を当てた内容としました。出征した兵士、中学校・女学校等に在籍した学徒、銃後を守った女性及び兵士の家族、「少国民」として教育された子どもたちが戦争とどのように向き合い、また従事したのかという現実について、残された当時の公文書・私文書（日記・書簡類）及び写真などの一次資料をとおして、認識を深めていただければと思います。

関連行事として、当館所蔵のCIE（連合国総司令部（GHQ）組織下の民間情報教育局）製作の教育映画（別名ナトコ映画）の上映会を開催いたします。これは、GHQの占領政策の一環として戦後の日本人教育を目的に製作され、全国各地で上映された映画で、戦後日本の歩みの一端がうかがえる貴重な映像です。

戦後70年を経過して、戦争体験世代が急速に減少している今日、戦争そのものの記憶が社会から失われつつあります。戦争の記憶をいかに次世代に引き継いでいくのか、大きな課題となっています。今回の展示をとおして、戦争の記憶が幅広い世代の人びとにつながり、戦争の惨禍と平和の尊さを考える機会にしていただければと念願しています。

最後になりましたが、本展の開催にあたり、貴重な公文書を寄せていただいた神山町教育委員会、徳島県立海部高等学校、ならびに遺品を含む大切な資料をご提供いただいた関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成27年8月5日

徳島県立文書館長　山　下　知　之

戦地へと赴く民衆

太平洋戦争終結までの日本では、原則としてすべての男子に兵役の義務が課されており、多くの若者が軍隊に徴集され、戦地へと赴いていった。ここでは当時の徴兵制度の一端を残された資料をもとにみることにする。

■第二乙種（徴兵籤（くじ）札氏名票）

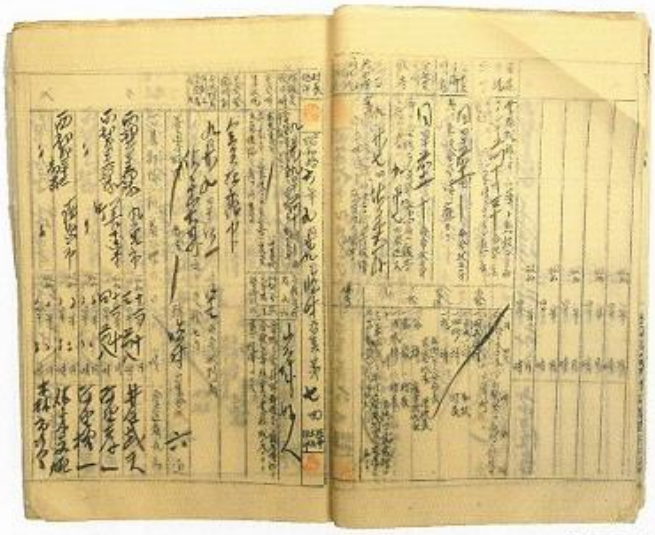
この時代、20歳（1943年12月からは19歳）になった男子は徴兵検査を受けることが義務づけられていた。検査の結果、受診者は体格や病気の有無などをもとに甲種～戊種に分けられ、適性上位と判定された甲種、続いて乙種の者が現役兵として入営し一定期間の兵役を務めた。兵役法が改正される1939（昭和14）年までは、この徴兵検査に続いて甲種など各区分毎に抽籤が行われ、このときに引いた籤札の番号をもとに現役兵として軍隊へ入営する者が決定された。「第二乙種（徴兵籤札氏名票）」は、そのような人々の人生を大きく左右した籤札の一例である。

第二乙種（徴兵籤札氏名票）

■動員日誌

戦時など大量の兵員が必要となった場合は、現役兵としての任期を終えた予備役・後備役、徴兵検査の結果現役兵として入営しなかった補充兵などの在郷軍人が召集される。このときに使用されるのが一般に〝赤紙〟と呼ばれる召集令状である。各連隊区本部で作成された召集令状は警察署を通じて町村役場に届けられ、役場の兵事係から応召者（不在の場合は戸主または家族など）に直接手渡された。令状本紙は運賃割引証明証を兼ねており、応召者が召集部隊まで持参した。

名西郡鬼籠野（おろの）村（現神山町）旧役場に残されていた「動員日誌」には、日中戦争が勃発した1937（昭和12）年7月から1944（昭和19）年7月までの7年間に鬼籠野村役場が行ったすべての召集令状の受領・交付事務が記録されている。そこには個々の令状について、同村を管轄する石井警察署からの動員令予報の到着、召集令状の到着、名簿との照合及び本人への交付、石井警察への令状交付済み報告、村長等による応召者宅訪問、地元神社での奉告祭及び壮行会開催等について分刻みでの詳細な記載がなされている。



動員日誌

この「動員日誌」は、召集・徴発事務の改善等の基礎資料とするために作成が命じられたものであるが、予報令・令状の到着や本人への交付は深夜早朝でも行われたことなど、当時の召集事務の実態を示す貴重な一次資料といえる。

■陸軍下士卒在隊間成績綴
－役場に送られた兵士の勤務評定－

一方、鬼籠野村旧役場には「陸軍下士卒在隊間成績綴」という簿冊も残されている。そこに綴られているのは、1912（明治45）年から1940（昭和15）年までの間の、同村出身の現役兵の在隊中の勤務状況に関する連隊長等から村長宛ての報告書である。当時の役場はさまざまな兵事関係の業務を担っていたが、在隊中の勤務成績まで通知されていたことは、日本の徴兵制度を考える上での興味深い資料といえるであろう。

陸軍下士卒在隊間成績綴

ある兵士の日記から
ー陸軍飛行兵 林道夫ー

林道夫

戦地に赴き死に直面していた兵士は日々何を考えていたのであろう。ここではその一例として、現在の小松島市出身の陸軍飛行兵林道夫の日記を見てみよう。

1939(昭和14)年に陸軍に入営した林道夫はノモンハンの戦いなどに参加した後、1941(昭和16)年8月に陸軍熊谷飛行学校に入校。一時満州に赴任した後に、1944年7月からは宇都宮陸軍飛行部隊で助教として勤務。同年12月24日、フィリピンのルソン島において、搭乗機が撃墜されて戦死している。

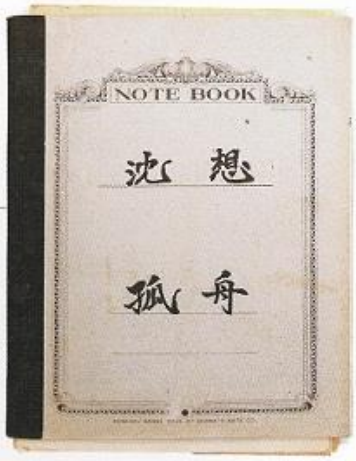
林家文書の中には、熊谷陸軍飛行学校在学中の1941(昭和16)年8月4日から翌年10月20日までの「操縦日誌」が残されている。これは林の飛行訓練記録で、当時の訓練内容を知る上で貴重な資料となっている。一方、1941年5月から翌年5月にかけての林の個人日記である「沈想」も残されている。ここで24歳の林は「孤舟」というペンネームを使い、文章から内省的な彼の人柄がにじみ出ている。

まず、8月4日の林道夫の初飛行を「操縦日誌」と「沈想」から見てみよう。

■所感(「操縦日誌」)

何ダガ飛行術ハ人間技デナイ用ニ思ワレテイタガ、此ノ分ダト自分デモ物ニナル様ナ気ガスル。(以下略)

※原文のまま　以下同じ



沈想

■八月九日(「沈想」)

思ヒ起セバ四日、無事飛行学校に入校スル事が出来タ。何か嬉シイ様ナ苦シイ様ナ気持ガ胸中ヲ左右スル。愈々(いよいよ)俺モ学生トシテ咲送ッタ事ニナル。学生カラ入隊シ、学生トシテ終ワルノデアロウカ。一竟恵心学務ニ精励スル可、大イニ張切ルベシ。四日ヨリ新生活が始マッタノニ俺ノ心ハ少シモ新シイ英気ガ起ラヌ。徒(いたず)ニ奥ヘ奥ヘト退却スノミ。何トカシテ此ノ生活ヨリ切換ヘントセシガ、思フ様ニナラズ。苦痛ガ苦痛ヲ生ジテ現在ヨリ将来ヘト発展スル。心機一転此ノ事ガ如何ニ重大且困難ナル事ナル可ヲ痛感セシメラル。現在抱イテイル夢ガ実現出来ルノハ何時ノ日デアロウ可。ソレニハ一倍ノ苦労ガアル事ナラン。外ハ雨、俺ノ心ハ曇リ、雨ニナリソウダ。

■十二月八日(「沈想」)

1941(昭和16)年12月8日、日本はアメリカ・イギリスに対し宣戦布告する。次の文章はその日の「沈想」。

秋の風が吹く　秋の風は一人で聴くべきである。秋の道は一人で歩むべきである。　秋はたゞ一人で考ふべき時である。子ども達の心をもちて

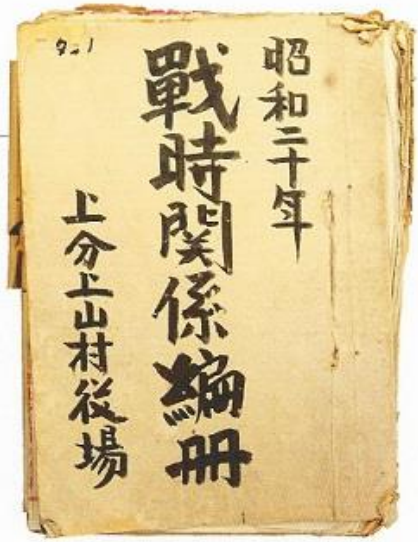
人間の世界には多過ぎる程の不合理があり、悪があり、陰謀がある。打算がある。それは他の動物や植物の世界では見られない醜さである。人間の世界では愛がある。人のために自分の肉体を殺すほどの献身行為がある。そこには他の動物や植物の世界で見られない美しさがある。常識結構なり。シカシ、常識ノミニ頼ロウトスル社会ハ小ザカシイ人間ノ世界ノミヲ見ナケレバナラヌ。「イヴン」ノ馬鹿ハ常識ヲ超越シ、真理ソノモノノ中ニ住デイル。(以下略)

林道夫は、時代に翻弄されながらもその時代を対象化できたひとりである。ものごとの表面に心を奪われず、立ち止まり考えることの重要さを、林道夫の青春の記録は、現在の私たちに語りかけているように思われる。

戦争が残した傷跡

戦争は多数の戦死者・戦傷病者、空襲などによる戦災被災者、外地からの未帰還者を生み出していった。ここでは戦後も長く尾を引くことになる、これらの悲劇の一端を残された資料を通して紹介する。

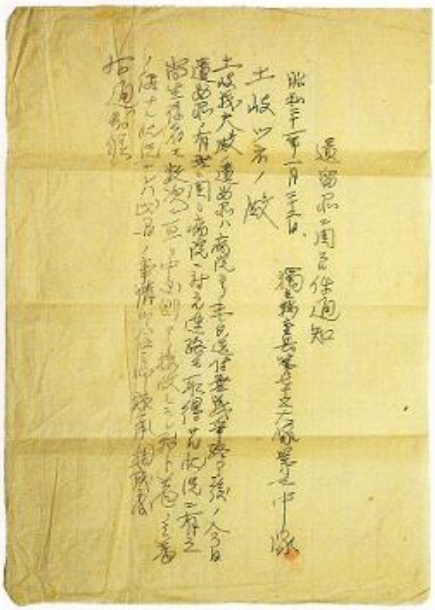
■戦時関係編冊



戦時関係編冊

戦争の激化とともに戦死者や戦傷病者の数も急増していった。名西郡上分(かみぶん)上山(かみやま)村(現神山町)旧役場に残されていた「戦時関係編冊」には、軍からの戦死者・生死不明者内報や村葬、護国神社への合祀などに関する1943(昭和18)年以降の公文書が多数綴られている。なかには、戦死者の住所と留守家族名に誤りのある戦死者内報に対して、村役場が複数回にわたって軍当局に確認を求めた文書も残されている。「大東亜戦争関係書綴」「兵事関係書類綴」などの同様の簿冊がいくつかの役場公文書に残されており、戦時中における町村役場の対応を示す貴重な資料となっている。

■遺留品ニ関スル件通知


遺留品ニ関スル件通知

二人の息子を戦地に送っていた徳島市在住の土岐ツネノのもとに、1945(昭和20)年9月に中国で戦病死した三男茂夫の所属部隊から、「遺留品ニ関スル件通知」という翌46年1月付けの文書が届いている。そこには、病院と連絡がとれないため遺品の回収は無理であること、中国軍の接収により生存者も着の身着のままの状態であることなど、現地の厳しい状況が綴られている。

■昭和二十一年六月(満州引き揚げ状況の件)他
－取り残された人々－

昭和二十一年六月
(満州引き揚げ状況の件)

敗戦後の混乱の中で、外地にいた人々の帰国は困難を極め、多数の未帰還者が生み出されていった。南満州鉄道株式会社(満鉄)の四国連絡所が1946年6月に関係者に出した通知には、北緯38度線によって満州との通信が途絶したために情報の入手が困難になっていることなどが記されている。このような過酷な状況の中で、多くの人々が行方不明となっていった。

1953(昭和28)年に制定された「未帰還者留守家族等援護法」には、未帰還者の調査究明を国の責任において行うことが明記されている。土岐ツネノの次男忠夫は1945年8月にインドネシアで行方不明となっており、ツネノは息子の調査続行を県知事などにたびたび陳情していた。1959(昭和34)年に「未帰還者に関する特別措置法」が制定され、行方不明となっている未帰還者の死亡宣告を請求する権利を厚生大臣(一部事務を都道県知事に委任)にも認めている。ツネノのもとにも戦時死亡宣告に関する通知が届けられてきたが、そこには同年8月時点での全国の未帰還者約32,000人、そのうち徳島県の未帰還者337人という数字が載せられている。

学校と戦争

昭和になると、歴史の流れは戦争への道を急速に進んでいった。国内では戦時体制が着々と強化され、物心両面から人々を統制していった。「欲しがりません勝つまでは」の合い言葉のもと、人々は耐乏生活を送りながら戦争に協力していった。こうした潮流は教育界にも多大な影響を与え、国家に奉仕する軍国主義教育へと大きく舵が切られていった。尋常小学校は1941（昭和16）年に国民学校と改称され、中学校や女学校などでは軍事教練や勤労奉仕などの比重が高まり、国を挙げての戦いに飲み込まれていった。

■徳島中学校（現城南高等学校）『渦の音』

渦の音

1900（明治33）年に創刊された県下最古の校誌『渦の音』は、生徒や卒業生などによる論説から学術・文芸作品に至るまで幅広い分野から成り立っている。日中戦争開始後の第49号（1938年刊）には「梅林大尉の遺骨を迎ふ」「撃て暴虐の世々敵」「東洋平和の確立」など戦争に関係する生徒作品20数編が掲載されており、戦時色が一挙に前面に出てくる。これ以降、最終号となる第54号（1943年刊）までの『渦の音』からは、時代の波に翻弄される徳島中学校及び生徒の姿が浮かび上がってくる。このような時代に同校の校長を務めた（1936～45年）深井源治が、軍部と対峙し可能な限り中学教育を守ったことが『徳島中学校・城南高校 百年誌』などで高く評価されている。

■徳島県女子師範学校・徳島高等女学校（現城東高等学校）『郷土教育紀要』

郷土教育紀要

この『郷土教育紀要』は文部省から資料収集費の交付を受け、郷土についてまとめた資料調査研究報告書である。1935（昭和10）年に発行された第1集から翌年の第3集までは、各分野における教員の学術的な調査研究報告が掲載されており、報告者の学問に対する姿勢や熱意がよく伝わってくる。ところが1940（昭和15）年の第4集では「興亜教育」と「殉国美談」が二本柱となるなど、掲載内容が一変している。学校における研究活動が軍国主義に染めあげられていく一例をここに見ることができる。

■新町小学校　『しんまち』

1876（明治9）年に設立された徳島市の新町小学校は自由主義教育の影響を強く受けた学校であった。しかし昭和の時代になると、児童たちにも戦争の影が落ち始める。『新町小学校百年』には当時を振り返り、「児童中心・自由と創造の大正教育観はいつしか歴史の彼方に押しやられ、教師も児童も気がついてみれば耐乏生活と総力戦体制の真直中に投げ込まれていた」と記されている。太平洋戦争期の『しんまち』（同校校誌）75～82号をみても、戦勝祈願の神社参拝をはじめ、訓話、出征兵士の見送り、英霊の出迎え、勤労奉仕作業や防空訓練などの諸活動が記録されている。

しんまち

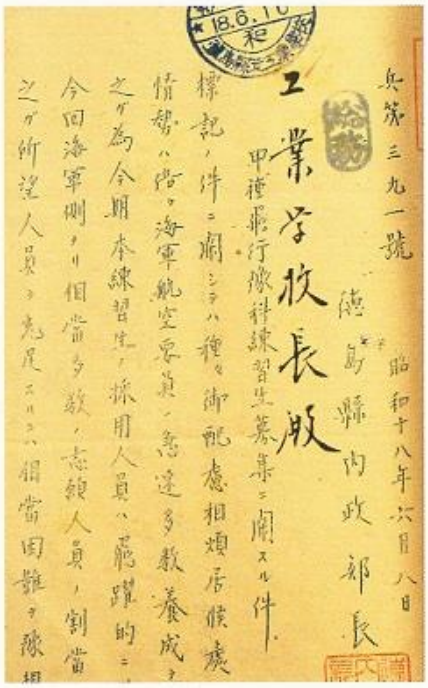
■海部高等女学校（現海部高等学校）
「女子勤労挺身隊書類」
「学徒勤労動員ニ関スル書類」

戦争が長期化し労働力不足が深刻化するにともない、軍需工場などに女学生も動員されていった。海部高等女学校では1943（昭和18）年、卒業生による女子勤労挺身隊が結成され軍需工場などへ送り出されている。「女子勤労挺身隊書類」には結成要綱から、出動命令書、隊員名簿、挺身隊慰問、期間延長に関する事柄など、詳細な内容が記されている。また「学徒勤労動員ニ関スル書類」には、1944年10月に県知事からの学校報国隊出動命令を受けて大阪の軍需工場に派遣された学徒勤労動員に関する資料が綴られている。

女子勤労挺身隊書類　学徒勤労動員ニ関スル書類

■県立工業学校（現徳島科学技術高等学校）
「甲種飛行予科練習生募集ニ関スル件」

1943年6月、県内政部長から各中学校・専門学校校長に対して海軍甲種飛行予科練習生（予科練・甲飛）志願者数が割り当てられた。これは海軍から県への割り当てを受けたもので、県立工業学校に対しては「貴校ニ於ケル志願者選出目標員数ヲ概ネ14名ト致度ニ付之ガ獲得予想人員承リタシ」とあるように14名の割り当てがあり、志願者予想人数の報告を求められている。この飛行予科練習生募集からは、戦況悪化のなかでパイロットの不足に悩む海軍の実情をうかがい知ることができる。なお、割り当て人員数14名に対し同校の志願者数は18名であった。



甲種飛行予科練習生募集ニ関スル件

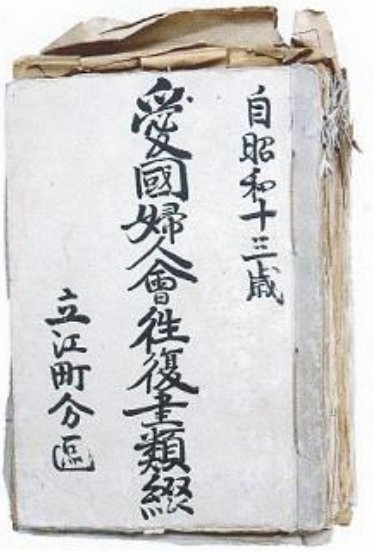
「銃後の守り」と女性たち

兵士として戦地に行くことのなかった女性たちは、戦争とどのような関わりを持っていたか。日中戦争勃発後、女性たちも労働力として徴用されたが、家庭にある女性たちの役割はあくまでも家事や育児などであり、それぞれの家庭を守ることが「銃後を守る」こととされていた。

明治から昭和にかけて、家庭にある女性たちが様々な活動を行うための団体が結成される。その一つが愛国婦人会である。陸海軍の後援を受け1901（明治34）年に結成された愛国婦人会は、徳島県においても同年に県支部が結成されている。もう一つは、大阪国防婦人会を母体とし、陸軍の後援を得て1932（昭和7）年に結成された大日本国防婦人会である。大日本国防婦人会は、白エプロン（割烹着）に襷姿での活動が会の規則であり、会員全員がこのスタイルで活動し、短期間に多くの会員を集めた。徳島県では、1935（昭和10）年に徳島本部が結成されている。

■自昭和十三歳愛国婦人会往復書類綴

1938（昭和13）年から1942（昭和17）年までの愛国婦人会徳島県支部立江町（現小松島市）分会の活動に関係する文書が綴じられている。県支部から依頼を受け、慰問袋の寄贈や羊毛を再利用するために反毛報国運動として廃品羊毛の収集、出征家庭・戦病死遺族らの家計困難者の調査、愛国貯金の各分会割当、飛行機寄贈のための寄附金募集など、出征した兵士とその家族への支援につながる活動、時には他府県で発生した災害への募金活動なども行っていた。



自昭和十三歳愛国婦人会
往復書類綴

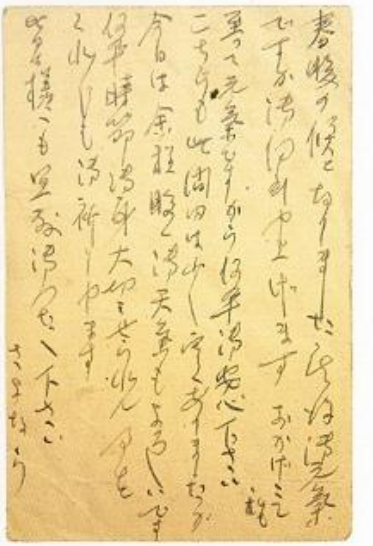
■徳島婦人国防

大日本国防婦人会徳島本部の活動は、その会報「徳島婦人国防」に詳しく掲載されている。会報は、毎月1回発行され、各分会の活動報告や本部からの会の活動方針、「銃後」における女性の心得などで構成されている。日々の節約・贅沢への戒めや貯蓄の奨励を記事にしている他、出征家族の家事支援や農繁期の手伝いの報告や、戦死者の母の気丈な振る舞いなども紹介している。各分会からの献金や個人的な献金についても記事があるが、そのほとんどが少額の献金であり、わずかな節約で献金できることを毎号取り上げている。また会誌では、市町村で結成された分会ごとの会員数を発表している。1940（昭和15）年7月10日発行の「徳島婦人国防特別号」によると、徳島県内の会員数は11万人余りであった。この市町村の分会に加え、製糸工場・マッチ工場や花街で働く女性たちの分会も結成されていた。

徳島婦人国防

■土岐ツネノ（葉書・近況報告）
■土岐忠夫（葉書・近況報告）

戦争が進む中、多くの家が家族を戦地に兵士として送り出すこととなる。出征した息子から母親に宛てた葉書と、その母親が息子に宛てた葉書を見てみると、互いに相手の健康を気遣い、相手に心配をさせまいとする内容となっている。母親にとって、息子からの葉書がくることが、息子の無事を確認できる唯一の手段だったのではないだろうか。


出征中の息子に近況を伝える
土岐ツネノの葉書

戦時貯金と国債

戦時中、戦費を支える財政資金として、国民の貯蓄が郵便貯金や国債購入を通じて運用された。その資金は大蔵省預金部に預け入れられ、ほぼ戦時国債の消化に充てられていた。戦時下の内閣情報部（後の情報局）が発行した『週報』を見ると、毎週のように広告が掲載され、戦費調達のため郵便貯金や国債購入が奨励されていることがわかる。1942（昭和17）年には、貯蓄総額230億円（当時の国家予算の約3倍）の目標が立てられ、割増金（懸賞金）のある貯金・債券も発行された。

一方、1943年頃には、統制経済下においても物資不足が深刻化し、インフレが進み始めていた。戦後には極端な物不足と戦後処理のため爆発的にインフレが進み、1950（昭和25）年頃までに小売物価指数が250倍（100円のものが25,000円となる）を超えるような状況となった。そのため、戦時中の庶民が貯めていた多くの貯金や国債は、基本的に償還は行われていたが、紙くず同然となってしまった。

貯蓄戦でも米英打倒　230億
『週報　301号』

■ラッパ貯金

東北地方のある山村の国民学校の子どもたちが連絡用のラッパを購入するため、彼らだけで朴葉（ほおば）（食材を包む材料などとして活用）を集め、それを売って郵便貯金をする。仲間の困難を乗り越えながら、最後にはラッパを購入するという、貯金の重要性を説く紙芝居である（1941年刊）。

ラッパ貯金

■大東亜戦争特別据置貯金証書

5ヶ年の無利子の据え置き期間を持つ貯金証書。この証書は2円の「割増金付郵便貯金切手」11枚をまとめて22円として、預け入れされた証書である。

大東亜戦争特別据置貯金証書

■割増金付戦時郵便貯金切手 第7回

割増金というクジが付いた郵便貯金の債券。1941（昭和16）年6月8日に第1回額面2円で発行され、最低5枚ないと貯金とならない仕組みであった。「割増金がよく当たる」「軍用の弾丸の資金になる」ということで「弾丸切手」といわれた。

（上）割増金付戦時郵便貯金切手
（下）弾丸切手の広告
『週報　337号』

■戦時報国債券

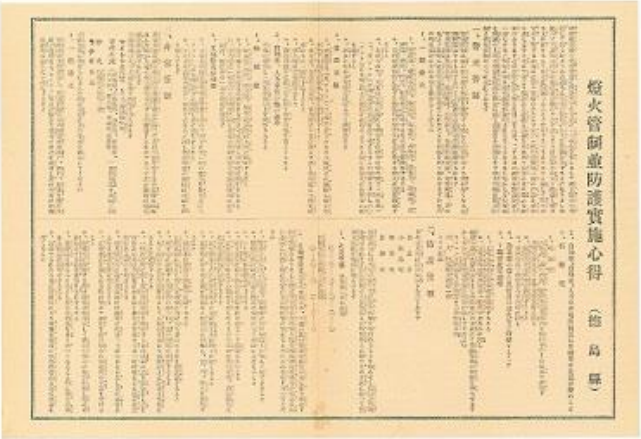
割増金付き戦時報国債券。太平洋戦争が始まり、報国債券から戦時報国債券に名称が変わった。戦時報国債権は無利子で、元金の償還は10年後。毎年1回抽選を行い、当選すると割増金が支払われた。額面金額で売り出されたため割増金が高額になり、クジの要素が強くなっている。

戦時報国債券

防空訓練と徳島大空襲

徳島大空襲は、1945（昭和20）年7月4日未明に行われ、当時の徳島市内の約62%が焦土と化し、死者約1,000人、負傷者約2,000人、被災者約70,000人に及ぶ大きな被害を出した。日本本土へのB29による本格的な空襲は、1944年から始まり、徳島の空襲は、東京、名古屋、大阪、横浜、神戸など大都市が壊滅的な打撃を負ったのち、中小都市空襲の一環として行われた。空襲の規模は防空訓練などの予測を大きく超えるもので、徳島市内は未曾有の被害を蒙った。ここでは徳島県における防空訓練、及び徳島大空襲に関する資料の一端を紹介する。

■灯火管制並防護実施心得



灯火管制並防護実施心得

ガスマスクを付けての訓練

1937（昭和12）年4月5日に公布された防空法に基づいて、徳島県が5月28, 29の2日間（年不詳）、沿岸地方1市79ヶ村で行った防空演習の実施心得。警戒管制・非常管制・防護警報の3段階に分かれ、一般家庭、自動車、船舶、工場などを含めた大規模な訓練であった。防護警報は攻撃を受けたことを想定するもので、ガス弾による攻撃も想定に入っていた。

■川田町部落会東市久保防空組合編成表

1941（昭和16）年1月川田町（現吉野川市）の東市久保部落会で作られた防空組合（隣組）の編成表。5軒から8軒を一つの班として7班とし、班ごとに井戸・消火器・梯子・砂箱・シャベルなどの数を書き上げている。

川田町部落会
東市久保防空組合編成表

■「家庭防空の手引き」（『週報　第256号』）

家庭防空の手引き
『週報　第256号』（表紙）

濡れ筵（むしろ）を使った消火『週報　第256号』

1941（昭和16）年9月3日発行の『週報』では、「家庭防空の手引」を特集している。焼夷弾や爆弾の種類、対処法などを詳しく紹介しながら、家庭や隣組組織で防火設備等を準備し、延焼を防ぐことをめざしている。どの程度の空襲を受けるのかという項には「ロンドンや重慶（中国）のように連日連夜の猛爆を受けることは絶対に考えられません」と書かれている。

■カンチャンの防空読本

1943（昭和18）年6月5日発行の漫画。現実となりつつあった空襲への対処を描いている。作者の平井房人は戦前に活躍した漫画家・挿絵画家で、宝塚少女歌劇の美術部に所属し、舞台の台本やポスター制作に携わっていた。

カンチャンの防空読本（表紙）

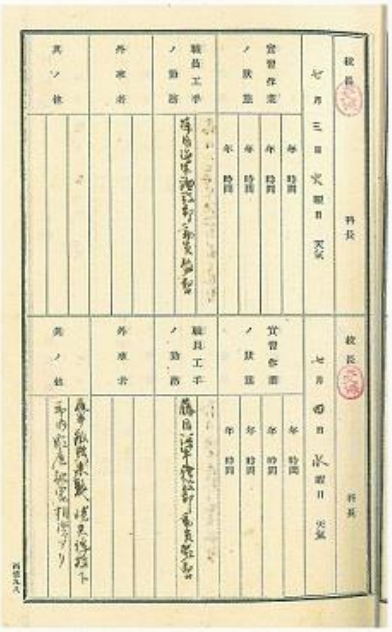
カンチャンの防空読本

防空訓練

■工場日誌

県立工業学校（現徳島科学技術高等学校）建築科の実習作業の状況などを記した日誌。1916（大正5）年から残されており、1940（昭和15）年で途切れた後、1945・46年度の2冊がある。1945年4月からの日誌を見ると、生徒のうち3・4年生は、ほぼ毎日海軍施設部もしくは造船工場へ勤労動員されている。また、徳島における実際の警報に関わる記述も見られ、徳島大空襲があった7月4日には「夜半敵機来襲焼夷弾投下　市内家屋被害相当アリ」と記されている。なお、7月10日から8月19日までは夏期休業中のためか記述はない。

工場日誌（表紙）



工場日誌より7月4日の記述

警報の種類	警報のあった日付（昭和20年）
警戒警報	4/7・17・25・26・27・28, 5/3・5・7・24・25・30, 6/1・2・3・4・5・7・8・12・13・14・15
空襲警報	4/7，5/3・5，6/・5・7・8・15

空襲後の徳島市内（岡田写真部）

■簡易住宅関係　徳島県福祉課－戦後の復旧－

終戦直後、日本国中の都市が戦災による住宅の焼失で極度の住宅不足に直面していた。国は1945年9月4日の閣議により、今後の越冬対策のため「罹災都市応急簡易住宅建設要項」を決定した。その中で、まず第一次として全国で30万戸を建設する案が出され、徳島では3,100戸が割り当てられた。空襲で失われたとされる約17,000世帯には及ぶべくもないが、空襲の焼け跡から復旧の第一歩を踏み出した。

簡易住宅関係綴（表紙）

応急住宅図（簡易住宅関係綴）

展示資料一覧

No.	表題	年代	資料番号
戦地へと赴く民衆			
1	第二乙種(徴兵籤札氏名票)	1933(昭和8)年	ムラカ00481
2	動員日誌	1937(昭和12)年	神山町旧役場公文書
3	陸軍下士卒在隊間成績綴	1912(明治45)年	神山町旧役場公文書
4	R(学徒出陣者に対する両親・学友の寄せ書き)	1945(昭和20)年	勝西家文書
5	航空記録	1939(昭和14)年	田中家文書
6	祝出征伊丹功君	昭和前期	伊丹家文書
ある兵士の日記から―陸軍航空兵 林道夫―			
7	沈想	1941(昭和16)年	ハヤシ00052
8	操縦日誌	1941(昭和16)年	ハヤシ00044～47
9	清水良策(入営者に対する県知事激励文)	1938(昭和13)年	ハヤシ00147
10	友ヲ偲ブ　林軍曹(広池学園同窓会関係綴)	昭和前期	ハヤシ00039
11	忘勿草(西堀部隊卒業記念文集)	昭和前期	ハヤシ00042
戦争が残した傷跡			
12	戦時関係編冊	1943(昭和18)年	神山町旧役場公文書
13	大東亜戦争関係書綴	1944(昭和19)年	神山町旧役場公文書
14	遺留品ニ関スル件通知	1946(昭和21)年	ムラカ00448
15	昭和二十一年六月(満州引き揚げ状況の件)	1946(昭和21)年	ムラカ00511
学校と戦争			
16	渦の音	1900(明治33)年～	岩村家文書
17	郷土教育紀要	1935(昭和10)年～	岩村家文書
18	しんまち	1941(昭和16)年～	タカハ00531～539
19	女子勤労挺身隊書類	1943(昭和18)年	海部高等学校所蔵資料
20	甲種飛行予科練習生募集ニ関する件 (昭和18年度本庁往復書類綴)	1943(昭和18)年	K200800169
「銃後の守り」と女性たち			
21	自昭和十三歳愛国婦人会往復書類綴	1938(昭和13)年	コマツ02129
22	徳島婦人国防	1922(昭和11)年	岩村家文書
23	国婦銃後の花	1942(昭和17)年	岩村家文書
24	土岐ツネノ(葉書・近況報告)	昭和前期	ムラカ00277
戦時貯金と国債			
25	ラッパ貯金(紙芝居)	1941(昭和16)年	ニシサ01045
26	第六回割増金付報国債権	1941(昭和16)年	カカワ00295
27	割増金付戦時郵便貯金切手第七回	1942(昭和17)年	カカワ00302
28	戦時報国債権	1943(昭和18)年	サト200416
29	大東亜戦争特別据置貯金証書	1943(昭和18)年	ムラカ01134
防空訓練と徳島大空襲			
30	灯火管制並防護実施心得	1940(昭和15)年	イタミ00449
31	川田町部落会東市久保防空組合編成表	1941(昭和16)年	タカミ00117
32	週報第256号(家庭防空の手引)	1941(昭和16)年	クラモ03974
33	カンチャンの防空読本	1943(昭和18)年	タカハ00591
34	空襲下の救護法	1944(昭和19)年	タカハ00048
35	昭和20年度起債許可書	1945(昭和20)年	K200200474
36	昭和20年簡易住宅関係綴	1945(昭和20)年	K200700356

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。

空襲後の徳島駅仮設駅舎（岡田写真部）

文化の森開園25周年事業
特別企画展
終戦70周年記念
民衆が見た戦争

平成27年8月5日 発行

■編集・発行
徳島県立文書館
〒770-8070 徳島市八万町向寺山
電話 088-668-3700

印刷/徳島県教育印刷株式会社
〒770-0873 徳島市東沖洲2丁目1-13
電話 088-664-6776